

ハンカチの舞台の謎

—『ガリヴァ旅行記』の細部に見られる不具合と解釈の可能性—

山内 暁彦

The Mystery of the Stage of Handkerchief :
A Possible Interpretation of an Inconsistent Detail in *Gulliver's Travels*

Akihiko YAMAUCHI

Abstract

There are many mysteries in the details of *Gulliver's Travels*. It seems that the description of the stage on which Gulliver let the Liliputian horses exercise is erroneous concerning its structure and size. But if we make thorough consideration, we can find out that Swift's description is rather correct. To make the stage we should put the sticks in the ground and make them slant a little, though this is not indicated clearly by the author. Also we can make use of the mysterious ninth stick at the centre of the whole structure as a support of the handkerchief.

Though the stage can actually be built from Gulliver's handkerchief and thirteen sticks, it is still impossible to let the troop of twenty-four horses maneuver on it when we adhere to the scale of 1 to 12. The field is too small for the cavalry. We need to interpret the latter half of the episode differently by means of a sur-realistic method. The episode resembles a Japanese rakugo-story, called 'Atama-Yama,' which means 'Head Hill.' In this fantastic story a man grows a cherry tree on his head and bewilderingly it is on his head too that many people gather to see the blossoms. The man's head and the crowd in 'Atama-Yama' correspond to the handkerchief and the horses in *Gulliver's Travels*.

Behind the episode of the exercise on the handkerchief we can discover many points of significance. For example, the handkerchief probably means the Union Jack which represents the Union of England and Scotland accomplished by Queen Anne in 1707. We may assume that, as is demonstrated in this episode, there are numerous possible interpretations of many details in *Gulliver's Travels*.

序

『ガリヴァ旅行記』の「リリパット渡航記」で描かれたリリパット国は、現実の世界と比べてちょうど12分の1の大きさであることになっている。だいたいいにおいてこの縮尺は遵守されているのであるが、細部の記述を見るといろいろな不具合が生じている。この論文では、それらの中から、ガリヴァが行なった余興である、ハンカチの上での騎馬隊の演習の部分を取り上げる。この箇所では説明されている演習用の舞台の寸法や構造に関しては、確かに一見すると間違った記述がされているように見える。だが、良く考えてみれば、実際にはかなり正確に描かれているものであるのだ。つまり、この箇所には、実はしっかりと考慮された正しい数値が述べられているにもかかわらず、作者の説明不足のため、これまでその正しさに恐らく誰も気付いていないのである。舞台は1枚のハンカチと9本の縦棒と4本の横棒できちんと作り上げることができるということを指摘したいのである。

具体的には、まず始めに、原文を参照しつつ我が国でこれまでに出版された主な翻訳4種を比較検討し、この箇所がいかにか読み間違いやすい箇所であったか、という事を指摘する。そのあとで、作者がいかにか正しい記述をしているかを検証し、本作品に接する際には、読みの浅さが大変つまらない結果に導かれてしまうという事実を述べたい。作者は、あえて説明を省略することによって、あたかも読者の注意力と論理的な思考能力を試しているかに見えるほどであるのだ。読者が注意深ければ注意深いほど、記述が正しいということはよく分かるのであるが、読者がよく考えない場合には、単なる不具合であると見なされてしまうという、かなり微妙な状況が存在するのである。

更には、舞台は具合良く作り上げることはできても、演習を実行できるか否かという点に関しては、不具合は依然として残る、ということを指摘する。すなわち、舞台自体は作品の記述に即して製作することができても、12分の1の縮尺に固執する限り、騎馬を24騎その上に乗せて演習まで行わせるのはやはり不可能だと言わざるを得ないのである。そこで、現実に即した解釈から離れて、いわゆる超現実的な読み方を導入することを通じて、このエピソードの後半部分を別の仕方で解説する可能性を提示する。その際、落語の「あたま山」に言及する。

最後に、このエピソード全体に対して、いわゆる深読みをいろいろと試みる事によって、表面的な記述の正確さと不具合との裏に隠されている意味を推測し、ある意味では勝手な解釈をして遊ぶ楽しさを、このハンカチ上での演習の

エピソードがいかに多様に読者に対して提供してくれるかを指摘する。ひいては『ガリヴァ旅行記』という作品が、多種多様な解釈の可能性をいかに豊かに持ち合わせているかという事実を如実に示す事例として、このエピソード全体を位置付けたい。

I

この小論で問題にするハンカチの舞台の上での騎馬隊の演習のエピソードを扱った部分の原文は、以下の通りである。この論考で問題になる箇所には前もって下線を施しておく。

THE Horses of the Army, and those of the Royal Stables, having been daily led before me, were no longer shy, but would come up to my very Feet, without starting. The Riders would leap them over my Hand as I held it on the Ground ; and one of the Emperor's Huntsmen, upon a large Courser, took my Foot, Shoe and all ; which was indeed a prodigious Leap. I had the good Fortune to divert the Emperor one Day, after a very extraordinary Manner. I desired he would order several Sticks of two Foot high, and the Thickness of an ordinary Cane, to be brought me ; whereupon his Majesty commanded the Master of his Woods to give Directions accordingly ; and the next Morning six Wood-men arrived with as many Carriages, drawn by eight Horses to each. I took nine of these Sticks, and fixing them firmly in the Ground in a Quadrangular Figure, two Foot and a half square ; I took four other Sticks, and tyed them parallel at each Corner, about two Foot from the Ground ; then I fastened my Handkerchief to the nine Sticks that stood erect ; and extended it on all Sides, till it was as tight as the Top of a Drum ; and the four parallel Sticks rising about five Inches higher than the Handkerchief, served as Ledges on each Side. When I had finished my Work, I desired the Emperor to let a Troop of his best Horse, Twenty-four in Number, come and exercise upon this Plain. His Majesty approved of the Proposal, and I took them up one by one in my Hands, ready mounted and armed, with the proper Officers to exercise them. As soon as they got into Order, they divided into two Parties, performed mock Skirmishes, discharged blunt Arrows, drew their Swords, fled and pursued, attacked and retired ; and in short discoverd

the best military Discipline I ever beheld. The parallel Sticks secured them and their Horses from falling over the Stage ; and the Emperor was so much delighted, that he ordered this Entertainment to be repeated several Days ; and once was pleased to be lifted up, and give the Word of Command ; and, with great Difficulty, persuaded even the Empress her self to let me hold her in her close Chair, within two Yards of the Stage, from whence she was able to take a full View of the whole Performance. It was my good Fortune that no ill Accident happened in these Entertainments ; only once a fiery Horse that belonged to one of the Captains, pawing with his Hoof struck a Hole in my Handkerchief, and his Foot slipping, he overthrew his Rider and himself ; but I immediately relieved them both : For covering the Hole with one Hand, I set down the Troop with the other, in the same Manner as I took them up. The Horse that fell was strained in the left Shoulder, but the Rider got no Hurt ; and I repaired my Handkerchief as well as I could : However, I would not trust to the Strength of it any more in such dangerous Enterprizes. (下線は全て引用者による)^{注1}

この部分を簡単に要約すると、ガリヴァが9本の柱を立て、それに括り付けられたハンカチの上で騎馬隊が演習をして、それを見た皇帝がとても喜び、余興を何度もさせ王妃にも見せたが、一度軽い事故が起きたためにこの余興は取りやめにした、ということになる。何とも他愛のないエピソードである。「リリパット渡航記」の物語の流れの中の位置付けとしては、始めのうちは鎖に繋がれていたガリヴァであったものの、こうした余興を積み重ねた結果、だんだん評判が上がって、この巨人には害がないということがリリパット人たちに分かり、めでたく釈放される運びになる、その要因としては、これはかなり重要なエピソードなのである。だが、この余興自体は、見戯に等しいと言えなくもない、ごくつまらない話のようにも思われるものである。

更に、細部の記述自体に関しても、一読してよく分からない点を、大きく分けて2点ほど、このエピソードは抱えている。第一点は、ガリヴァがしつらえた舞台の構造そのものである。細かく言えば、9本の棒を地面に立てて四角形にするということがまず不可解である。更にそれらの棒の長さが2フィート(約

注1 Jonathan Swift, *Gulliver's Travels*, vol. XI of *The Prose Writings of Jonathan Swift*, ed. Herbert Davis (Oxford : Basil Blackwell, 1965), pp.40-41.

60cm) であるのに四角形の1辺が2フィート半(約75cm)であるということも不可解である。これら二つの点は、一体どうなっているのだろう、と誰しも思う点ではないだろうか。しかし、よく考えれば、これで良いのである。

第二点は、この舞台の上で24騎の騎馬隊が演習をした、と書かれている点である。リリパット国にあるいろいろなものは普通の世界のものと比較してすべて12分の1であるという設定になっている。この縮尺を現在我々が目にする馬にそのまま適用すれば、リリパットの馬の大きさは、体高(足先から肩までの高さ)は5インチ(約12.5cm)は下らないであろうし、鼻先から尾まで10インチ(約25cm)近くになる計算になる。一方、ハンカチは1辺の長さが仮に2.5フィート(約75cm)であるとすると、それは馬3頭分の長さでしかないことになる。ところが、実際にはリリパット産の馬はこれより少し小さいようである。というのは、眠ったガリヴァを牽引するのに用いられた馬がリリパットでは最大のものであり、その体高は4インチ半(約11.5cm)であると記述されているからである。^{註2} 従って、明記されてはいないが体長の方も少し短くなる。しかしそれでも8インチ(約20cm)は下らないであろうから、事情は大して変らない。この小論の後段で詳しく述べるが、実際にはハンカチの1辺の長さは2.5フィートではなく2フィート(約60cm)余りしかないはずである。以上のことを勘案すれば、ハンカチの1辺は結局馬3頭分しかないという計算になるのだ。大抵の読者は、演習をすることは不可能だ、と考えるに違いない。しかし、よく考えれば、これで良いのである。ただし、第一点とはまったく別の意味で、よく考えなければならぬのであるが。

上記の二つの点に関して、「これで良いのである」と、結論から先に述べてしまったが、詳しい理由は後段で説明することにし、以下においては、原文の解釈の参考にするため、これまでになされた代表的な邦訳の業績を順に検討しながら、原文がいかに誤解されてきたか、言い換えれば、原文がいかに説明不足であるかを指摘したい。更に、その不足を読者が補うことがいかに困難なことであるか、そしてそれがたとえいかに困難なことであっても、正しい読解のためには、これは是非ともせねばならない必要なことであるか、ということをも示して行く。長くなるが、訳文は当該のパラグラフ全体を引用する。引用文は縦書きを横書きに改める。その際、漢数字は適宜アラビア数字に改めることとする。ルビは省略する。下線は引用者によるものである。

注2 *Gulliver's, Travels*, Pt. I, ch. i, p. 27.

始めに取り上げるのは、これは戦後の日本の読者の持つガリヴァのイメージの形成に相当大きく影響したのではないかと推測される、中野好夫による『ガリヴァ旅行記』である。あたかもガリヴァが江戸っ子でもあるかのような錯覚を我々に与えてくれる調子の良い訳文だ。この訳が個人的にはとても好きだという読者も多いのではないだろうか。難点としては、厳密さに多少欠けるといふことと、訳語の表現が平成の時代にあってはさすがに古い、ということが挙げられよう。

[中野訳]

軍隊の馬も、御料馬も、毎日我輩の前を引き廻されるので、今では尻ごみするどころか、平然として我輩の足許までも来るようになった。ある乗手などは、我輩が地面に手をおくと、馬を躍らせて跳び越えたり、帝室狩猟官の一人などはみごとな逸物に乗って、我輩の片足を靴ごと、ヒラリと跳び越えたが、いや実に天晴れなものだった。ところで幸運にも我輩はある日、とてつもないことでたいそう皇帝をお喜ばせすることができた。我輩は長さ2フィート、太さ普通の杖くらいの棒を十何本かお取寄せいただきたいと願ひ出た。さっそく皇帝は林野局長官に言いつけて、然るべく示達方をお命じになったが、はたして翌朝になると、6人の樵夫が6台の車を、それぞれ8頭ずつの馬に曳かせて来た。我輩はまず9本の棒をとって、2フィート半四方の正方形ができるように地面にしっかり打込んだ。それからもう4本を使って、これを地面から約2フィート、水平に四隅に縛りつけた。で今度は我輩のハンカチをば直立している9本の棒に結びつけ、これを太鼓の皮のようにピンと張った。すると4本の横棒がハンカチよりは5インチばかり高くなって、ちょうど四方の欄干の代りをした。用意ができると、我輩は騎兵の精鋭24騎をこの平原の上で調練させて御覧に入れましようとして申し上げた。さっそく御嘉納があったので、我輩は彼らを武装、乗馬のまま一人一人つまみ上げ、それから適当な指揮官たちをも乗せてやった。整列が終ると、彼らは敵味方に分れて、襲撃の模擬戦をやるやら、矢を射かけるやら、剣を抜いて、追いつ追われつ、進退の秘術を尽し、一言でいえば我輩もかつて見たことがないほどみごとな訓練振りを示したのである。横棒があるので人も馬も舞台から落ちる心配はない。皇帝はもうたいへんなお気に召し方で、何日も何日も、またしてもこの余興をやってみろと仰せになる、一度などは御自身お上りになって、号令をお掛けになったことさえある。とうとう仕舞にはいやだとおっしゃる皇妃を無理に説き

伏せて、訓練の有様がくまなく眺め渡せるように、舞台から2ヤードばかりに乗輿のまま皇妃を上げてやってくれいと仰せになる。この余興中故障ひとつ出なかったのは我輩の幸運であった。もっとも一度だけ、ある隊長の乗っていた悍馬があまり蹄で足搔いたために、ハンカチに穴を開けて足をすべらした。乗手もろとも横倒しになったが、ただちに我輩は双方を助け起して、片手で穴を押えながら、他の一方の手で兵隊どもをひとりひとり、ちょうど、つまみ上げてやったと同じようにして降ろしてやった。倒れた馬は左肩の筋を違えたようだったが、乗手に怪我ひとつなく、ハンカチはできるだけ繕いはしたが、もう危くてこうした危険な芸当はやることはできなかった。^{注3}

訳文はこれでだいたい合っていると思われる。解釈の参考にするには十分であろう。ただし、事実上はたぶん合っているであろうから、問題視するまでもないのであるが、棒の本数は訳し間違いである。「十何本か」ということではなく「何本か」が正しい。

次には、梅田昌志郎による訳を取り上げる。これは存在があまり知られていないかも知れないものである。筆者が最近入手した旺文社文庫版の訳書には、その巻末にかなり詳細な解説や年譜がある他、これもかなり親切な註が当該のページごとに付けられていて、年少の学習者向けという趣きである。訳文自体もなかなか正確で、好感が持てるものである。中野訳と違い、もはや「我輩」とは称していない点が寂しい気がしてしまう読者も多いであろうが、これは致し方ないことであろう。

[梅田訳]

軍馬も皇帝の馬も、毎日私の前を引き廻されていたので、もはや怖気づくこともなく、平気で私の足もとまで来るようになった。私が地面に片手を置くと、乗り手たちが馬を躍らせて跳び越えたり、皇帝の狩猟官の一人などは、大きな駿馬に打ち跨がり、私の片足を靴ごと物の見事に跳び越えたものだった。幸いなことに、ある日私は、えらく変ったやり方で皇帝を喜ばせることとなった。私は長さ2フィート、太さは普通の杖くらいの棒を何本か取り寄せていただきたいと願い出たのだ。皇帝はすぐさま林野長

注3 中野好夫訳『ガリヴァ旅行記』（新潮社、新潮文庫、1951年、1992年改版）、43-44頁。

官に命じ、翌朝6人の杣夫が6台の荷車を、それぞれ8頭の馬に曳かせてやって来た。私は運ばれた棒のうちの9本をしっかりと地面に刺しこんで2フィート半平方の正方形をつくり、ほかに4本の棒を地面から2フィートばかりのところで四辺に水平にして縛りつけた。それからハンカチを直立している9本の棒に結びつけて太鼓の皮のようにきっちりと張った。すると4本の横棒がハンカチよりも5インチほど高いために、手摺の役を果すことになった。仕事をおえると、私は皇帝に、陛下の最良の騎兵24騎をこの平原の上で調練させたいと申し出た。皇帝はよろしいと言ったので、私は武装した騎兵を両手で一人一人持ち上げてやった。指揮官たちも乗せてやった。整列が終るやいなや、彼等は敵味方二手に分れて、模擬戦をやり、矢尻なしの矢を射たり、剣をひき抜いて、追いつ追われつ、攻撃退却、要するに私の見たかぎりこれ以上はないという軍事教練ぶりを披露してくれたのである。横棒があるため人も馬も転落する心配はなかった。皇帝は大いに喜んで、この楽しみを何日もくりかえせと言う。ある時などは自分から進んで上り、号令をかけた。また、いやがる皇后を無理に説き伏せて御輿のまま私に持ち上げさせ、舞台の2ヤード以内のところから演習をくまなく見物させたりした。こうしたお楽しみの中に故障ひとつ起こらなかったのは私の幸運だった。ただし、一度だけ、隊長の一人の乗っていた悍馬が、あんまり蹄で足搔いたために、ハンカチに穴を開け、足をすべらして、人馬もろとも転倒したことがあったが、私はすぐに助け起し、片手で穴を塞ぎながら、もう片方の手で一人ずつ兵隊を下してやった。上げてやった時と同じやり方でだ。転んだ馬は左の肩の筋を違えたが、乗り手にけがはなく、ハンカチはできるだけ繕ったが、しかしいくら丈夫なハンカチだからといって、もうこんな危険な事はやらないことにした。^{注4}

訳文はこれで特に大きな問題はない。ただし「四辺に水平にして縛りつけた」は間違いである。「四隅に」が正しい。結果として横棒が辺の部分構成することになるので、少し誤解が生じたのかも知れない。また、原文には「いくら丈夫なハンカチだからと」いってとは書いてないような気がする。

次は、現在どこの書店でも簡単に手に入れることのできる翻訳のひとつである、平井正穂の岩波文庫版のものを見ておこう。この訳の全体を通じての特徴は、パンクチュエーションにかなり気を使っていることである。原文のイタリッ

注4 梅田昌志郎訳『ガリバー旅行記』（旺文社、旺文社文庫、1976年）、35-37頁。

クスの部分を翻訳では括弧に入れるなどの配慮がしてあるのだ。こうした細かい点にも注意が行き届いた厳密な訳業であり、大変素晴らしいものであると考えられる。ただ、この点に関しては、かえって字面が煩わしくなってしまうような印象が与えられてしまう場合があるということが残念と言えば残念である。本論で問題にしている箇所については、丸括弧の用法が適切かどうか疑わしいという点が少し気になる。

[平井訳]

騎兵部隊の軍馬や王室厩舎の馬は、毎日のように私の前に引っぱり出されたので、次第に私に馴れてきて、別に不安がる様子もなく、私の足もとまで近づくようになった。私が手を地上に横たえていると、その上を跳びこえてゆく騎手たちも現われた。皇帝直属の狩猟官の一人は、大きな駿馬を御して、靴をはいたままの私の足の上を跳びこえた。この跳躍たるや、実に見事という他はなかった。ところで、或る日のこと、私は運よくとてもいおうか、とにかくひどく珍しい方法を用いて、皇帝の心を楽しませることができた。私はまず、高さは2フィートで、太さは普通の杖くらいの、棒を何本か用意していただきたい、と皇帝に所望した。早速、陛下は、林務庁の長官を呼びつけ、然るべき指示を部下に伝えるようにと命じられた。翌朝になると、6人の林務官が、各自1台の車をそれぞれ8頭の馬に牽かせながらやってきた。私は運ばれてきた棒のうちからまず9本をとって、縦横2フィート半の正方形になるように、地面にしっかりと打ち込んだ。次にさらに4本の棒をとり出して、地面から約2フィートの高さの所で、水平に一直線になるように四隅で結び合わせた。次に、初めに真っ直ぐに打ち込まれて立っている9本の棒にハンカチをきつく結びつけ、四方八方にちょうど太鼓の皮のようにできるだけぴしっとのばした。こうすると、4本の横の棒が、張りつめられたハンカチよりも約5インチ高くなり、したがって四方のどちらの側においても、一種の安全柵の役目を果たすことになった。仕事が一段落つくと、麾下の精鋭な騎兵部隊の一部（といっても、計24名だが）に、この平らにのばした布地の上で演習をさせるように取り計らってほしい、と皇帝に願い出た。この申し出はすぐに聞き届けられた。私は、すでに武装して馬に乗っていた騎兵を、一人ずつ手でつまみ上げたが、演習を指揮する然るべき士官もつまみ上げたことはない。整列が終るや否や、彼らは二手に別れて模擬戦を開始した、——矢を射る（但し、鏃はなまくらにしてあった）、剣を抜く、逃亡し追跡す

る、攻撃し退却する、——要するに、私の眼前に未だ見たこともないような見事な戦闘演習がくりひろげられたのだ。4本の横棒が柵の役目を果たして、彼らが馬もろとも舞台から墜ちるのを防いだ。皇帝の喜びようといったら大変なもので、何日間もその命令によってこの催物が行われる有様であった。或る時などは、自ら舞台上がって、号令をかけられる始末であった。しまいには、しきりにためらっておられた皇妃に、輿ごとこの男にもち上げてもらったかどうか、としきりに口説かれるというわけで、私もその輿を舞台の近く2ヤードの所までもってきあげたが、そこからなら皇妃も演習のすべての状況を一目でご覧になれたはずだと思う。この催物の最中に、一度も致命的な事故が起こらなかったのは、私にとっては誠に有難いことであった。ただ一度、一方の隊長が乗っていた悍馬が、前脚の蹄で地面を引っ掻いたはずみに、そこに、つまりハンカチに、穴を開けてしまった。脚がすべって、馬も倒れたが、乗っていた隊長も投げ出された。もちろん、私はすぐに人も馬も両方助けてやった。片方の手でその穴を塞いでおいて、もう一方の手で、先につまみ上げたのと同じ要領で、この騎兵の一隊をつまんで地面に降ろしてやったというわけだ。倒れた馬は、左肩をくじいていたが、隊長の方は怪我一つしてはいなかった。私はできる限りハンカチを修理したが、どうやら破れやすくなっているらしく、もう二度とこんな危ない仕事に用いる気は起らなかった。^{注5}

訳文はこれでだいたい合っている。ただ「(といっても、計24名だが)」というただし書きには、数の大小に関わる何らかの判断、すなわち「たった」24名だ、もしくは「かなり多くて」24名だ、という判断が入っているかのように見えるので、わざわざ括弧に入れるのはかえって良くないかも知れない。これに対して「(但し、鏝はなまくらにしてあった)」という説明は、括弧の中に入れておくのがふさわしい説明であって、この場合の丸括弧の使用はむしろ的確な判断であろう。この鏝の件に関しては最初の中野訳には、文の調子を優先したためであろうか、全然書かれていないことに注意されたい。最後にこれは蛇足だが、「どうやら破れやすくなっているらしく」とは原文には書いてないような気がする。

最後に、現在のところ最も新しい翻訳である富山太佳夫の業績を取り上げる。これは、岩波書店の「ユートピア旅行記叢書」の配本の最後を飾るのにふ

注5 平井正穂訳『ガリヴァー旅行記』（岩波書店、岩波文庫、1980年）、41-43頁。

さわしい画期的な訳であることは言うまでもない。訳文全体が、平成の時代によく適合した、現代の日本語の規範とも言うべきものになっているのではないだろうか。一例を挙げれば、これまで「企画士」などと訳されることの多かった、ラガードの“Projector”を「ベンチャー事業者」とするなど、猫尻すべからざる言語の感覚に満ちた訳業であると言っても良いだろう。

[富山訳]

軍の馬も王室の厩舎の馬も毎日私の前に引き出されるものだから、もう怖じ気づかなくなり、平然と足許まで寄って来るようになった。地面に手をおくと、それを跳び越えてみせる騎手も現われたし、皇帝の狩猟官の一人にいたっては堂々たる駿馬にまたがって、私の足の靴の上を跳んでみせたが、これは見事なものであった。ある日のこと私はとんでもない方法で皇帝に気晴らしをしていただく幸運に恵まれた。私の方から長さが2フィートで、普通の杖くらいの太さの棒を何本か用意していただきたいとお願いすると、陛下は森林長官にそのように指示しろとお命じになり、翌朝には6人の森林官が6台の車を各々8頭の馬にひかせてやって来た。私はまず9本の棒をとって、2フィート半四方の正形状に地面にしっかりと固定し、次の4本を地面から2フィートの高さに水平に置いて、四隅をゆわえ、そのあと直立している9本の棒にハンカチを結びつけ、太鼓の皮のようにまんべんなくピンと張ると、その4本の水平な棒がハンカチよりも5インチほど高い位置に来て、四方の横柵の代用となった。この作業が終了したところで、陛下に精鋭24騎をこの平原上で演習させる御許しをいただきたいと申し上げた。陛下からはよかろうとの御言葉があったので、私は武装して乗馬したままの騎兵をひとりずつ手で上にあげてやり、指揮をとる士官たちもあげてやった。整列が終わると、彼らはすぐさま二手に分かれて模擬戦を始め、先をなまくらにした矢を放ち、剣を抜き、追う、逃げる、攻める、退却する、要するに、かつて眼にしたことのない見事な演習を見せてくれたのである。水平棒が人と馬が舞台から落ちてしまうのを防いでいた。皇帝は大いに御満悦で、数日にわたってこの催し物の続行を指示され、一度などは朕を上へとお命じになって、欣然と号令を発され、しまいには、すったもんだの挙句に皇妃に向かって、輿ごと持ちあげさせて舞台から2ヤードくらいのところまで行ってみろ、演習全体がくまなく見えるぞと説得を始められる始末であった。こうした余興の最中に、ひどい事故が起きなかったのはまことに倖いであったが、一度だけ、ある隊長

を乗せていた悍馬が蹄で地面を引っかきすぎてハンカチに穴をあけ、足を滑らせて、乗り手もろとも倒れてしまったので、私は咄嗟にその穴を片手で塞ぎ、もう一方の手で、兵隊たちを上にあげたときと同じ要領で下に降ろしてやった。倒れた馬は左の肩を脱臼していたが、乗り手には怪我ひとつなく、私の方はハンカチをなるたけ繕うようにはしたものの、心もとなくて、二度とこんな危険な芸当をする気にはなれなかった。^{注6}

「よかろうとの御言葉があった」、「すったもんだの挙句に」などの表現も「ベンチャー事業者」同様に、現代風の表現であって、とりわけ若い読者には文章の理解がし易くなっているのではないだろうか。また「すったもんだの挙句に」に相当すると思われる箇所、“with great Difficulty”は、前の三つの訳文では完全に欠落してしまっていたり、他の文言に適当に折り込んでしまっていたりしていたのであるが、これを今回初めて独立して訳出してある。これは、この訳書が、先人の訳業を適当に繋ぎ合わせただけのものではなく、細かく注意を払いつつ、独自に練り上げた訳であるということを良く伝える事例でもある。

ただし、我々が今問題にしている箇所に関して言うと、実は問題がない訳ではない。まず、細かいことだが、転んだ馬は「筋を違えた」程度であり、必ずしも「脱臼」をしたのではないような気がする。また、これより大きな問題もある。「地面にしっかりと固定し」という表現がそうだ。この表現では原文、“fixing them firmly in the Ground”の中にある“in”がまったく訳出されていない。これは舞台の構造及び構成部品の棒の長さについての議論に大きく関わって来る重要なことなのである。やはり舞台の支えとなる9本の棒は、「地面にしっかりと打ち込ん」でおきたいところである。あまりにもくくだしい指摘ではないかと思われるかも知れないが、このような細心さがこのエピソードの読解には求められて来るのである。

では、どれくらいの深さに棒を地面に打ち込めば良いのであろうか。Earnest E.Calkinsは「少なくとも6インチ」と述べている。^{注7}これはいかがなものであらうか。もし仮に縦棒が他の支えなしに単独で直立しなければならないのなら、確かに6インチくらいは地中深く打ち込まねばならないであらう。しかし、それぞれの縦棒が横棒及びハンカチで結合されてひとつの構造物である舞台を

注6 富山太佳夫訳『ガリヴァー旅行記』（岩波書店、ユートピア旅行記叢書第6巻、2002年）、39-40頁。

注7 Earnest E.Calkins, “How Small Is Lilliput?” *Atlantic Monthly*, 190, No. 1 (1952), 78.

構成するのであって、1本1本の棒が単独で立っている訳ではないから、実際にはそれほど深く打ち込む必要はないのである。せいぜい1ないし2インチくらいで十分なのではないだろうか。かえって、あまり深く打ち込んでしまうと、柵の横棒が地面から最も高い位置に、すなわち縦棒の先端に来るようにしたとしても、地面から横棒まで「約2フィート」の距離が取れなくなってしまう、これでは本当に具合が悪いのである。もちろん、原文では縦棒をどのくらい地面に打ち込んだかなどという記述はない。この欠落を含めた様々な説明上の欠陥を、どうやら我々は適宜補っていかねばならないようなのである。作者は、あえて説明を省略することによって、あたかも読者の注意力と論理的な思考能力を試しているかに見えるほどだ。注意深い読者であれば、記述の正しさはよく分かるのであるが、そうでない場合には、記述は単なる不具合であると見なされてしまう。こういったかなり微妙な状況が、このエピソードには存在するのではないだろうか。

II

舞台の構造について、細かく注意を払いつつ、更に考察を進めていきたい。次には、原文の、“*tyed them parallel at each Corner*” の箇所について考えてみよう。上に引用した四つの訳文では、それぞれ以下のようにになっている。中野訳「水平に四隅に縛りつけた」、梅田訳「四辺に水平にして縛りつけた」、平井訳「水平に一直線になるように四隅で結び合わせた」、富山訳「水平に置いて四隅をゆわえ」。これらは大抵間違っていて驚かされる。正しいのは何と中野訳ただひとつだけである。梅田訳は「四辺」が間違い。平井訳は「一直線になるように」が余分。富山訳の「置いて」では誤解が生じてしまう。このように四つの訳のうち三つに何らかの間違いがあるのだ。原文の英語は大して難しくないのに、このように間違いが起きてしまったのは何故であろうか。その理由は、原文には書いてないことを訳者が何とか補おうとして失敗してしまったからだ、と見るのが妥当であろう。一般的に、翻訳とはなかなか難しいことであると言われているが、そのことがこの一例でよく分かっていうものだ。

最大の問題点は、横棒の本来の役割が何であるのかということである。単に安全柵の役を果たしたということだけではなく、舞台の構造上不可欠の部品であるということが見落とされてしまっているということなのである。原文にはこう書かれている。“*and the four parallel Sticks rising about five Inches higher than the Handkerchief, served as Ledges on each Side.*” そして4種の訳はそれ

ぞれ以下の様である。

すると4本の横棒がハンカチよりは5インチばかり高くなって、ちょうど四方の欄干の代りをした。 (中野訳)

すると4本の横棒がハンカチよりも5インチほど高いために、手摺の役を果すことになった。 (梅田訳)

4本の横の棒が、張りつめられたハンカチよりも約5インチ高くなり、したがって四方のどちらの側においても、一種の安全柵の役目を果たすことになった。 (平井訳)

その4本の水平な棒がハンカチよりも5インチほど高い位置に来て、四方の横柵の代用となった。 (富山訳)

問題となるのは“served as”という表現である。この表現は、あるものが本来の用途に用いられた際にももちろん使われるものであるだろうが、これに加えて、本来の用途とは別の用途で、もしくは付随的な用途で、そのものが用いられた際の表現としても用いることが可能であるのではないだろうか。そして特に中野訳の「代り」とか、富山訳の「代用」という解釈が、この場合はよりふさわしいのではないだろうか。つまり、これらの横棒の安全柵としての「(目)」は、実はあくまでも付随的なことであって、本来横棒は物理的な力を担う構造物なのであるということだ。そしてこのことも、先程の縦棒の打込み具合と同様、原文にはあまりはっきりと書かれていない。多くの読者は単なる手摺であると思ってしまうのである。では、縦棒と横棒との構造は、すなわち舞台全体の構造は、一体どういうことになっているのであろうのか。

まず、縦棒の立ち具合について考えてみよう。結論を先に述べてしまえば、実は縦棒は決して垂直に立ってはいないのである。そうではなくて、少し傾いていると考えれば良いのだ。ところが、多くの読者は、これまで、何となく、

注8 筆者は、1882年にベルリンで出版されたと思しきこの版本自体は未見であるが、挿絵の鮮明な図版は次の冊子で見ることができる。『週刊朝日百科 世界の文学』第2巻 ヨーロッパⅡ 3 『スウィフト、デフォーほか』(朝日新聞社、1992年)、2-084頁。

「縦棒は垂直に立っている」と勘違いして来たという訳である。例えば、『ガリヴァ旅行記』のドイツ語のある版本の中の、この場面を描いた挿し絵もそうである。^{註8} この絵には4本の支柱が見えるが、いずれも垂直に立っている。

舞台の底面の1辺の長さは、原文にある通り、2フィート半で結構であるということにしよう。縦棒が垂直に立っていると考えると、ハンカチの面の1辺の長さも当然2フィート半になる。すると、横棒の長さが2フィートであるということとの整合性が失われてしまい、横棒が宙に浮いたようになってしまうのである。これは不都合である。では、どこが間違っているのだろう、と考えるのが普通であろう。しかし、Calkinsを含めた多くの論者は、この不具合に当惑するのみで、舞台の構造に関しては「よく分からない」とか「不可能である」とか述べるのみで、何ら意味のある解決策を提案しようとしないのである。

ここで我々は原文をもう一度よく吟味する必要があるだろう。その第一点は、“I took nine of these Sticks, and fixing them firmly in the Ground in a Quadrangular Figure, two Foot and a half square”の部分である。四角形の1辺の長さが2フィート半であるとされているが、それは地面の高さにおける数値であって、構造の最上部の数値であるとは限らないということである。つまり、上の方も下と同じ2フィート半であるとは書かれていないのである。ところが、Calkinsは、以下のように述べている。“Gulliver says the elevated was two feet and a half square.” ガリヴァはこのようなことは一言も言っていない。これは、Calkinsだけではなく、多くの読者がしてしまう誤解あるいは早とちりなのである。

第二点は、原文の“then I fastened my Handkerchief to the nine Sticks that stood erect”の部分である。この中で用いられている副詞“erect”に注意しなければならない。つまり、“erect”は、例えば“vertically”とは違うのではないだろうか、ということである。“erect”は、「しっかり垂直である」というよりはむしろ「横でなく縦になっている」という程度のニュアンスなのではないだろうか。ましてや、“erect”は、“perpendicularly”（垂直／鉛直）とは大きく異なっているはずだ。ところが、どういう訳か、大抵の読者は縦棒が垂直に立っているかのように錯覚してしまう。その理由は、彼らが原文をしっかりと読んでいないからというよりは、作者が棒の角度をきちんと説明せずに、“erect”などという曖昧な表現を用いているからだ、と思われる。繰り返すが、いずれの縦棒も決して地面と垂直に立っている訳ではないのである。垂直に立ってはいずれ、内側に少し傾いていると考えさえすれば、原文に書かれている数値に合わせて舞台の構造をきちんとイメージすることができるのである。

それでは、筆者が考える舞台の構造を、各部のサイズも含めて、ここでできるだけ詳しく説明しよう。まず縦棒の9本である。長さはいずれも原文通り2フィートであるとする。(しかし、多少の誤差はあり得るのできっかり2.0フィートであるとは言えないかも知れない。また、理想を言えば2フィートより1インチほど長い方が良い。なぜなら、これらの棒は、先に述べたように、1ないし2インチほど地面に打ち込んで固定せねばならないからである。) これら9本のうち、とりあえず4本を1辺2フィート半の正方形になるように地面に「打ち込んで固定」する。その際、4本すべてが正方形の内側の方向に少し傾くようにするのがこつである。厳密に言えば、これら4本の縦棒の上端と上端との間の距離が隣同士で約2フィートになるように内側に傾けるのである。これら四つの頂点に差し渡すようにして、長さ2フィートの4本の横棒を結わえ付ける。これらの横棒は、上から見て正方形になる訳だ。その際、横棒の先端が直接縦棒に接するようにして、少し傾いている縦棒がそれ以上は内側に倒れこまないように支えにすることが重要である。あるいは、4本の横棒が上から見て井型になるように結わえ付けても良いだろう。さらにハンカチをその四隅でもって4本の縦棒に、上から5インチのところまで結わえ付ける。単に結わえ付けるのではなく「太鼓の皮のように」ぴんと張らねばならないから、その力でもって4本の縦棒はますます正方形の内側の方向へと引っぱられることになる。それを押しとどめる役割が4本の横棒に期待される訳である。これが、先に、横棒は単に安全柵の役割を持つだけではない、と述べたゆえんである。構造物の内部でいろいろな方向の力が釣り合って、しっかりとした舞台が出来上がっていなければならないということである。

さて、我々は、支えの横棒自体がずり下がってしまわないように配慮せねばならないのではないかとということにここで気がつくであろう。それにはどうしたら良いだろうか。我々は、9本の縦棒のうち、まだ4本しか使っていない。余った5本のうちの4本にこの役を受け持たせてはどうだろうか。これらの4本の棒を底面の正方形の各辺を二等分するちょうど中間に立て、地面と水平になっている4本の横棒の中央にその先端を接するようにすれば良いのである。そうすれば、横棒にはそれぞれ1本ずつ、中央部に支えができることになり、横棒自体がこれより下にずり下がることなく、しっかりと安定することになるのである。後から立てられたこれら4本の縦棒も、始めに立てられた4本と同様、地面には1ないし2インチほど打ち込まれていて、少し内側に傾いていることは言うまでもない。

こうしてほぼ完成した舞台全体を横から見てみよう。それはちょうど台形に

なっているはずだ。底辺（台形の下底）の長さは2フィート半、それに対して横棒（台形の上底）の長さは2フィート。この台形を左右に均等に分割するように中心には縦棒が、手前に1本、奥にも1本、見える。そしてそれらが下の地面から上の横棒の中央部へと達して横棒を支えている。全体の高さは、見かけではやはり2フィートより少し（2インチほど）低いくらいだ。横棒から5インチほど下がった高さのところには、水平に張られたハンカチの面がある。その1辺の長さは2フィート強ということになるろう。舞台全体が、下に行くほど広がった、全体として見るからに安定した形状を呈していると思うのは筆者だけではあるまい。作品の原文には必要最小限のことしか書かれておらず、これほど細かな説明はなされていない。その不備を補いつつ、記載された数値や工程はすべて生かして、ここまでのところ、何とか舞台の構造を上手く推測することができたのではないだろうか。

だが、我々は最後の9本目の棒が残されていることを忘れてはならない。Calkinsもこれを“the mysterious ninth”と称していて、これがどういう構成部品であるのか、何も示唆をしていない。そこで最後にこの9本目の棒の謎を取り上げようと思う。この棒は一体どこに立てられているのであろうか。

ここでまた原文をよく吟味してみよう。原文には、“I fastened my Handkerchief to the nine Sticks”と、確かに書かれている。だが、この記述も説明不足の感をぬぐえないものだ。文字どおりに取れば、ハンカチを角の4箇所と辺の5箇所の計9箇所で棒に結わえ付けねばならないことになる。その場合は9本目の棒は辺の部分に立てられていなければならない。既に我々が想定したように、正方形の四つの辺の中央にはそれぞれ1本ずつの縦棒が立てられている訳だが、いずれかひとつの辺において、その縦棒が1本ではなく2本あるのだ、と考えることはできる。しかし、それでは何のためにある辺にのみ1本余分に支柱が添えられているのか、ということの説明は一寸つきにくいのではないだろうか。図形の対称性という観点からも、やはり9本目の棒は、正方形の辺の部分ではなく中心にこそ置きたいものであるのだ。従って、ここでは9本目は正方形の中心に立っているとの仮説を立て、それに基づいて論を進めて行こう。その際には、ハンカチを結わえ付けた棒の本数に関しては、次のように考えることができるだろう。すなわち、縦棒を全部まとめて9本と呼んだだけで、実際にハンカチが結わえ付けられたのはそれらのうちの4本（または8本）だけであるという可能性である。そうであれば、9本目の棒は中心の部分に立てられていて何ら差し支えないことになるのである。

ただし、この棒は、まん中にただ何となく立っているということではなく、

この棒の持つ構造上の役割が何であるかを想定する必要が生じて来るのは言うまでもない。それは一体どのようなものなのであろうか。四隅にある4本の縦棒を支えると同時に手摺の役割をも果たす4本の横棒には支柱が必要であるということは、先に述べた通りである。これと同様の理由がハンカチにも当てはまるのではないだろうか。すなわち、ハンカチは今のところは四隅にある4本の縦棒に結わえ付けることでピンと張った状態になってはいる。更にこれに加えて、作品には明示されていないが、索具を用いるなどの何らかの方法で、ハンカチの各辺の中央部にある4本の縦棒にもハンカチを結わえ付けることも可能であろう。

ハンカチが結わえ付けられているのが何箇所であるのかは判然としないのであるが、いずれにせよ、ハンカチ自体はしっかり固定されていると言えなくはない。だが、これは、上に何も乗せない段階でのことであって、ハンカチ自体の重さが支えられているに過ぎない。ところが、ガリヴァはこれからこのハンカチの上に合計24騎もの騎馬隊を乗せて、その上で縦横に演習をさせようというのである。いかにリリパットの騎馬や武者が小さく軽いとは言え、全体ではかなりの重量になることは確実だ。従って、ハンカチが上に乗せたものの重みで下に下がって来ないようにする何らかの方策が必要になって来るはずである。その際、第9番目の縦棒が正方形の中心に直立していれば、支えとしてかなり役に立つのではないだろうか。ハンカチの面の中心にこの棒の先端が達してハンカチを垂直方向に押し上げることになるからである。

もし仮に9本目は正方形の中心に立っているのであれば、この棒は、構造的には他の8本の棒とは離れて単独で存在することになる。上に馬どもを乗せれば、この棒は上からハンカチで押さえ付けられるであろうから、倒れにくくなるであろう。だが、基本的には、この棒は単独で直立していなければならない。その点が他の8本の縦棒とは異なっているのだ。ではこの棒が1本だけで安定して直立するようにするにはどうしたら良いであろう。これは、実は簡単なことである。この棒だけは他の8本の棒よりも深く地中に差し込めば良いのである。ハンカチから正方形の四隅の縦棒の先端までは5インチの高さであった。であるから、この棒は、それと同じく約5インチ分地中に埋め込んでおくというのはどうだろうか。そうすれば、この棒も他の8本の棒より短い必要はない、同じ長さ、すなわち2フィートのもので良い、ということになる。多少の長短の差はあったかも知れないが、これらの9本も含めて、ガリヴァが取り寄せた棒はいずれも2フィートの長さであったということになってるからである。

以上のことから、謎めいた9本目の棒は、どうやらハンカチの支えとして、

正方形の中心に、地面に5インチくらい深く打ち込まれて垂直に立てられているのではないか、という推測をすることができるのである。謎とされた9本目の棒の存在理由と、それが立てられるべき位置とが、これでまずまず上手く説明がついたのではないだろうか。もちろん、この棒は、あるいは存在しなくても良いものなのかも知れない。つまり、この棒がなくてもハンカチはずり落ちないようにできるかも知れないのだ。ないよりはあった方が良いという程度でしかないのかも知れない。また、逆にこれがあっても効果は期待できない、単なる気休め程度のものに過ぎないものであるのかも知れない。結局のところ、我々はあくまでも原文の「9本」という記述を無理に尊重したまでのことである。そして「9本」で間違いではない、謎は解けたのだ、ということが言えたとするならば、我々の当面の目的は達したと考えられる訳である。

最後に、以上の議論を根底から覆すようなことを言い添えておくのだが、実際のところは「9本」という記述自体が間違いなのであるという説を、筆者は否定するものではない。つまり、8本あるいは4本で良いのを、作者が勘違いをして「9本」と書いてしまったに過ぎない、という可能性も大いにあるのだ。恐らく大方の論者はそのように考えているであろう。前述のドイツの版本の挿し絵には、縦棒は4本しか描かれていない。また、瀬川昌夫訳の子供向けの版の伊藤展安による挿絵では、画面上にすべてが明示されている訳ではないが、縦棒は8本であるかのように舞台が描かれている。^{注9} そして両者共に少しも不自然には見えないのである。

ついでながら、9本という記述が仮に間違いであるとして、この間違いが起った理由を推測すれば、作者は、9本の柱と、1枚でなく4枚のハンカチで、漢字の「田」の字の形に平原を形作ることを当初は想定していたのではないか、という気もしないではない。こうすれば、必要な柱の本数とハンカチの面の数とが都合良く合致するのだ。更に、この場合、ハンカチ相互のつなぎ目の処置さえしっかりすれば、ガリヴァは4倍広い面積を騎馬隊に提供できる訳である。ただし、難船したガリヴァがハンカチを4枚も持っているということは少し不自然であるから、結局はこの案は棄てられ、ハンカチは1枚に改められたのが、その場合8本（または4本）に減らせるはずの柱の数は、どういう訳か9本のままになってしまった、ということなのかも知れない。もちろんこれは、根拠のない単なるひとつの推測であるのだが、実際は案外このような単純な理

注9 瀬川昌夫訳・文『ガリバー旅行記』（ぎょうせい、少年少女世界名作全集2、1982年）、35頁。

由が裏に隠されているということなのかも知れないのである。

さて、これまでのところでは、原文の記述をできるだけ尊重して、作者の説明の不足を注意深く補いつつ、何とか舞台の構造を合理的に頭の中で組み立てることに集中してきた。そして、その結果、縦棒9本、横棒4本、計13本の棒と、ハンカチ1枚を用いて、舞台が作れることを示した訳だが、その過程はどうだっただろうか。いささか無理をしてきたのではないかという気がしないでもないが、全体としては曲がりなりにも首尾良く説明が付けられたのではないだろうか。

とは言うものの、筆者は厳密な力学的な計算をして以上の記述をしてきた訳ではない。力学に詳しい専門の物理学者であれば、もっと的確な記述をすることができるであろうし、筆者の誤りも指摘することができるであろう。それには例えば以下のようなことも含まれるであろう。この構造物は全体が四角の図形の集合にしかになっていない。本当に安定した構造にするには、筋交いをかたりして三角形の構造を取り入れる必要がある。このままでは上下方向の力に対しては問題ないかも知れないが、斜めに捻るような力が加われば、舞台全体が簡単に捻じ曲がって倒壊してしまうに違いないのである、云々。

ということで、この小論は文科系の人間が適当に推量したものに過ぎないものだ、と批判されれば、それに対して効果的な反論はできないのである。しかし、『ガリヴァ旅行記』はファンタジーでないのと同様、理科系の書物でもないので、この程度の解釈でまずまず十分だと今は考えることにしたい。そして更なる厳密な考証は、より適格な論者に任せたいと思うのである。ともかく、これまで誰も気付かなかったこと、すなわち「縦棒は垂直ではなく斜めになっているのではないか」ということに気付いただけでも良しとしたいところである、というのが偽らざる気持ちであるのだ。

III

舞台の構造の問題の次に、ハンカチの上で24騎の騎馬隊が演習を行った情景の記述について解釈を試みるという、より難しい問題を取り上げて、論じていくこととする。ここで改めて原文および4種類の訳文を見てみよう。

As soon as they got into Order, they divided into two Parties, performed mock Skirmishes, discharged blunt Arrows, drew their Swords, fled and pursued, attacked and retired; and in short discovered the best military Discipline

I ever beheld.

整列が終ると、彼らは敵味方に分れて、襲撃の模擬戦をやるやら、矢を射かけるやら、剣を抜いて、追いつ追われつ、進退の秘術を尽し、一言でいえば我輩もかつて見たことがないほどみごとな訓練振りを示したのである。
(中野訳)

整列が終るやいなや、彼等は敵味方二手に分れて、模擬戦をやり、矢尻なしの矢を射たり、剣をひき抜いて、追いつ追われつ、攻撃退却、要するに私の見たかぎりこれ以上はないという軍事教練ぶりを披露してくれたのである。
(梅田訳)

整列が終るや否や、彼らは二手に別れて模擬戦を開始した、——矢を射る（但し、鏃はなまくらにしてあった）、剣を抜く、逃亡し追跡する、攻撃し退却する、——要するに、私の眼前に未だ見たこともないような見事な戦闘演習がくりひろげられたのだ。
(平井訳)

整列が終わると、彼らはすぐさま二手に分かれて模擬戦を始め、先をなまくらにした矢を放ち、剣を抜き、追う、逃げる、攻める、退却する、要するに、かつて眼にしたことのない見事な演習を見せてくれたのである。
(富山訳)

どの訳文も原文に描かれている情景をそれぞれ見事に訳出してあって感服するのだが、それらを比較対照してみたり、原文と比較してみたりするに付け、この記述は、まずどう考えても不可能であるように思えるのだ。何しろハンカチの平原の縦と横の長さは、この小論で我々が下した解釈に従えば、わずか2フィート（約60cm）しかない。面積はたったの4平方フィートである。24騎がその上に同時に乗ると、計算上は馬1頭につき6分の1平方フィート、すなわち約150平方cm（縦15cm、横10cmの長方形の面積）しかないことになる。これは、リリパット人の尺度で言えば、縦6フィート（約1.8メートル）横4フィート（約1.2メートル）の長方形に相当する面積だ。こんなに狭くては、リリパット産の馬が多少小型であるにしても、じっと立っているだけでも大変である。ましてや24騎が上に引用したような華々しい演習を行うなど、まったく不可能に思える。仮に、多くの読者が誤解しているように、ハンカチが2.5フィート

四方であったとしても、馬1頭につき0.26平方フィート（縦18.8cm、横12.5cmの長方形の面積）である。これは、リリパット人の尺度に換算して、縦7.7フィート（約2.5メートル）横5フィート（約1.5メートル）の長方形に相当する面積だ。先ほどとあまり変りない狭さである。先に指摘したように、ハンカチがもともとは4枚使用されるはずであったとしても、事情はあまり変らない。確かに全体の面積は4倍になるので、少しは身動きが取りやすくなるであろうが、やはり大して違いはなさそうなのである。原文に即して考えるという態度にあくまでも固執して、合計24騎の騎馬隊に与えられたスペースは2フィート四方であることに変わりはないと考える限り、我々は、演習のエピソードの後半部分には決定的な不具合が生じている、と考えざるを得ないのではないだろうか。

問題はハンカチの面積だけではない。馬の重さも大きな問題であるのだ。リリパットの騎兵が使用する馬の体重は、一体どれくらいであろうか。作者スウィフトが実際に日々身近に接して作品の記述の参考にしたと思われる馬は、17世紀から18世紀当時の英国産の馬であるはずだ。当時は馬の品種改良も現代ほど進んでいなかったのであるし、馬そのものも種類によって体格が大きく異なるので、参考程度にしかならないのだが、ここで現代の馬の体重からリリパットの騎兵の馬の体重を推測してみることにしよう。今日の競馬用のサラブレッドの体重は400キロ代から重いもので500キロあまり、最大種の挽馬シャイヤ一種の体重は約1トンから1.2トンであると言われている。とりあえず中を採って800キロとしよう。これを単純に12分の1の世界に移してみると、重さの値は体積と同じく12の3乗分の1すれば得られるから、約463グラムとなる。してみると、リリパットの馬は、騎手と装備の重さも含めて、1頭につきほぼ400グラムから500グラムというところではないだろうか。先にも述べたように、彼らは少し小型であるので、仮に1頭400グラムとしよう。それでも合計24頭集まれば、10キロ近い重さになる。1頭200グラムだとしても、24頭では5キロ近い重さだ。これは予想以上の重量である。果たして、棒に結わえ付け、支えをたった1本まん中にかっただけのハンカチ1枚で、全員を支えきれぬであろうか。支えきれぬとは筆者には到底思えない。ハンカチがずりおちるか、場合によっては上手く作ったはずの舞台全体が騎馬隊もろとも倒壊してしまうのではないだろうか。

では、このような不都合を含んだハンカチ上の余興のエピソードを、我々はどうのように解釈すれば良いのであろうか。多くの論者はこの箇所を考える際に、縮尺そのものが作者の頭の中で変動してしまっていて、リリパット人や彼

らの周りの事物の大きさは12分の1よりはずっと小さくなってしまっていると考えているようである。例えば、平井正穂は「訳註」で、次のように述べている。「作者の意識の内部ではリリパット人はますます矮小化されているらしい。」^{注10} それでは、その矮小化はどの程度のものであるというのであろうか。仮に、この箇所においては、リリパット人が12分の1の更に半分の身長である、すなわち、縮尺24分の1であるのだと仮定しよう。そうすれば、ガリヴァにとつての2フィートは、リリパット人にとっては、24フィートではなくて48フィート（約15メートル）に相当することになる。つまり、ハンカチの1辺の長さは2倍になるのである。すると、面積は4倍に拡大されるのであり、馬1頭分の割り当て面積も4倍に増えることになる。これくらいならばどの馬もゆったりと立っていられるだろうし、馬の一番遅い歩き方である「並足」程度でなら、互いにおつかりあうこともなく舞台上を行き来することができるだろう。だが、演習を大規模に行なえるまでの余裕は全然ない。12分の1の縮尺も24分の1の縮尺も、まさに五十歩百歩なのである。

では体重の問題はどうであろうか。24分の1の縮尺の世界では、12分の1の縮尺の世界と比べて、ものの重さは2の3乗分の1すなわち8分の1に減る。従って、騎馬隊全体の重さは、約10キロとしたものが1キロ強となって、この点はかなり改善されて具合が良いようである。あるいはこれくらいならばハンカチの舞台は壊れてしまうことはないであろう。

更にこれよりもっと極端に120分の1程度の縮尺であると想定してみよう。ここまで設定を変えてしまえば、作品に描かれた通りにハンカチの上を騎馬隊が縦横に走り回って演習を展開することは恐らく十分可能になるだろう。しかしそれではリリパット人の身長は何と0.6インチ（約1.5cm）にまで「矮小化」されてしまうのである。これではいくら何でもひどすぎるのではないか。ハンカチの上での演習というただひとつのエピソードを成り立たせるだけのために物語全体の12分の1という設定を根底から覆してしまうような措置は、緊急避難的であると言えども、やはり取るべきではないだろう。あるいは、12分の1という設定はやはり徹底されてはいないということを、多くの論者と共にめざるを得ないのだろうか。例えば、Isaac Asimov は、“Swift is obviously eager to present the humorous spectacle of a cavalry engagement on a pocket handkerchief, but for once he lets his enthusiasm get the better of his usual mathematical precision.” と述べ、この箇所が他とは異なり、本来の正確な設

注10 平井正穂訳『ガリヴァ旅行記』、437頁。

定の通りにはなっていないということを認めている。^{注11} また、A. E. Case は、作者の意図を斟酌して以下のように述べている。“Swift had ignored his scale deliberately for the sake of a picturesque incident—the troop of cavalry exercising on his handkerchief...”^{注12} 両者共に、縮尺の正確さは物語の内容の絵的な面白さの犠牲になっていると見なしているのである。

もし、このように考えなければならぬのであれば、せつかく我々が脳裏に築き上げてきたリリパットの現実性はもろくも失われてしまうことになってしまう。かと言って、12分の1という設定に拘泥する限り、演習の件に関しては、もはや我々は現実的な解釈で押し通すことはできないこともまた事実なのである。つまり、ハンカチの上には馬を数頭乗せておくだけで精一杯であり、その上を走り回ったりさせることまでは到底できそうもないのである。

この点に関して、先に言及した二つの挿絵は良く描かれていると言えよう。まず、ドイツ版の方では、ガリヴァは7頭目の馬を今まさに舞台の上にそっと置こうとしているところだ。瀬川／伊東版では8頭目を手のひらから舞台に乗り移らせようとしている。両者ともに、描かれているガリヴァやリリパット人たち、馬や舞台など、場面の全体を眺めてみると、縮尺はちょうど12分の1くらいに見えるという点では、かなり正確に描かれているようである。ただし、これら二つの挿絵を見るにつけ、演習自体はますます不可能そうだという印象は強まるばかりなのである。

ハンカチの上での演習の件に関して、縮尺を適当に調節するということも含めた現実的な解釈に頼ることには限界があるということがはっきりしたところで、我々の取るべき道は一体どのようなものがあると考えられるだろうか。それは、縮尺の数値を細かく調節するような小手先の手段を取ることとは正反対に、12分の1という設定をあくまでも尊重し、演習をしたという記述も信用し、その上で、物語の超現実的な展開を書かれてあるがままに受け入れることであるとしたらどうだろうか。これは確かに相当難しいことであるだけでなく、真っ当でない方法であるかも知れない。というのは、『ガリヴァ旅行記』は、全体的には、現実に即した記述で成り立っているからである。ガリヴァの様々な経験はすべて実際に起ったことであるかのように描かれていて、超自然的ないし

注11 *The Annotated Gulliver's Travels*, ed. Isaac Asimov (New York: Clarkson N. Potter, 1980), pp. 30-31.

注12 Arthur E. Case, *Four Essays on Gulliver's Travels* (Princeton: Princeton U.P., 1945; rptd. Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1958), p. 58.

幻想的な部分は極力排除されている。リリパット人もプロブディンナグ人も、フウイヌムもヤフーも、まるであたかも実在するかのように描かれているのである。ハンカチ上の演習だけを取り上げて、現実的な描写ではない、超現実的な描写なのだ、と見なすような読み方は、かなりの努力なしには受け入れ難いことであるだろう。だが、12分の1の縮尺を尊重する限り、現実的ないし物理的に不可能な事例が描かれているのだと見なさざるを得ないということは事実なのである。

では、2フィート四方のハンカチの上で12分の1の縮尺の騎馬24騎が演習を行っている情景とは、一体どのようなものとして想像されるべきものなのであろうか。これは、各読者の想像力、それも超現実的な想像力に任せられる以外にない。ある者は、24騎がお互いの身体をすり抜けつつ移動する姿を思い浮かべるかも知れない。またある者は、馬も矢も、超スローモーションで運動している様子を思い浮かべるかも知れない。ただし、これらは未だに現実主義的な想念に捕らわれている読み方だと言って良い。やはり、合理的に記述することも不可能、視覚化することさえも不可能な状況が述べられているのである、と考える他ないのではないだろうか。

ハンカチ上での演習のエピソードは、筆者には、落語の「あたま山」（別名「あたま山の花見」「桜ん坊」）を思い起こさせる。これは、さくらんぼの種をひとつすっかり飲み込んでしまった男の頭に何と桜の木が生えて来て、その頭の上で近所の人々が花見をしたりする、花見の客があまり五月蠅いので桜の木を抜いてしまうが、今度はその後でできた池で釣りをする者が集まって来る、あまりにも五月蠅いので最後は男は自分の頭の上にあるはずの池に身投げして自殺してしまうという、まさに奇想天外、超現実的な内容の落語なのである。木や池にまつわる話という点では『徒然草』の第45段「堀池の僧正」がこの落語の原典であろうか。ただし、この話には兼行風の教訓めいた所はない。ただの法螺話の類である。

この落語の面白さは、男が普通に生きていながら、その頭の上では大勢の人たちがこれまた普通に花見や釣りをしているという、現実にはあり得ない話があたかも当然のごとくに淡々と語られてしまうというところに存する。別に、男の身体が巨大化して、頭の上が花見の場所になったり池ができたりしたという訳でもなければ、見物に来た大勢の花見客や釣り人たちが皆小人だったという訳でもないのだ。まさに説明不可能な状況が語られるのであるし、落語を聞く客たちの想像力を試すような趣もある落語なのだ。「東西落語特選」というホームページの説明によれば、以前、TBSの『まんが日本むかし話』の中で

も昔話として脚色されたものが放映されていた由である。「一種、だまし絵にも似た妙な味の噺である」との評が同じHPには述べられているが、まさにその通りである。^{注13} ちなみに、麻生芳伸編『落語百選』によれば、この落語は、落語の始祖、安楽庵策伝の『醒睡笑』に源を発するところの、落語以前の「落とし噺」である、ということである。^{注14} するとこれはいわゆる古典落語のひとつではあるということになる。そうではあるものの、このねたは必ずしも切れ目なく上演されて続けてきた、という訳ではないらしい。「林家染二 オフィシャルホームページ」によれば、この噺は、故桂枝雀が落語作家小佐田定雄と共に、上方で復活上演させた噺であるとのことである。^{注15} ということは、それまでしばらく上演が途絶えていたということであろう。面白いけれども趣向の変った奇妙な噺だ、ということで敬遠されていたものが、枝雀らによって再発見され、再評価されたということなのかも知れない。確かにSF的な面白さ、ないしは奇妙でシュールな味わいのある、今日的な噺ではあると思う。

「あたま山」と『ガリヴァ旅行記』とを比べてみると、男の頭がガリヴァのハンカチに相当し、花見や釣りが騎馬の演習に相当する。落語では誰もが皆普通に花見や釣りをしていたのであるから、騎馬隊も普通に演習をしていたと考えて良いことになる。そうであれば、以下の記述も我々は「そのまま」受け入れて良いことになるのは言うまでもない。「整列が終わると、彼らはすぐさま二手に分かれて模擬戦を始め、先をなまくらにした矢を放ち、剣を抜き、追う、逃げる、攻める、退却する、要するに、かつて眼にしたことのない見事な演習を見せてくれたのである。」(富山訳)まさに「かつて眼にしたことのない」状況が読者の意識の上には現出していなければならないのである。

考えてみれば、12分の1という設定は、リリパットを現実に読者が想像する際に大変便利なように設定された数値であった。我々日本人の読者にとってはあまり実感が湧かないかも知れないことだが、日常的に12進法の度量衡に馴れ親しんだ英国の読者にとっては、これはこの上なく便宜な縮尺であるのだ。彼らは、インチをフィートに読み替えるだけで簡単にリリパットの世界に入って行けるからである。このようにして、架空の世界があたかも現実に入りそうだと読者に印象付けるために案出されたに違いない12分の1という設定ではありながら、それが厳密には遵守されていないということから、作品の現実性が損

注13 <http://www.geocities.co.jp/Hollywood/6684/sakurambo.html>

注14 麻生芳伸編『落語百選』(筑摩書房、ちくま文庫、1999年)、374頁。

注15 <http://www.udn.ne.jp/~someji/>

なわれてしまっているという事情が作中には生じていた。我々は12分の1の設定を棄ててしまい、場当たりの適当な縮尺を採用する代りに、あくまでも12分の1の設定に固執してここまで論を進めてきたのだが、その結果我々が導入せざるを得なくなったのは、現実性を飛び越えてしまった超現実性であったという訳である。何とも不可解な論旨であったと言わざるを得ない。これも何か作品の魔の手にかかった結果なのであろうか。

IV

先にも述べたように、ハンカチの上での演習の記述は、わずか数行ではあるものの、12分の1という設定にこだわる限り、この部分だけ超現実的な読みをせねばならないという点で、作品の中における異質な要素になっていることは否定できない。作品全体の数学的な整合性を考えれば、この大して面白くもないと思われるエピソードは、敢えて残すことはせず、削除してしまった方が良かったのではないかとさえ思えるのだ。では、なぜ作者は、このような一種の無理をしてまで騎馬の演習の場面を作品に盛り込んだのであろうか。それにはいろいろな要因が考えられるだろう。小論の最後にそれらを順不同に列挙してみよう。

騎兵の演習は第2篇「プロブディンナグ渡航記」にもこれと対応する記述がある。巨人たちが御す巨大な騎馬が巨人国の廣大無辺な演習地を縦横に駆け回る状況を見たガリヴァは、ほとんど圧倒されてしまうのである。巨人国の巨大で勇壮な騎兵と対照をなすように、リリパットの24騎は、柵に囲まれた狭苦しいハンカチの舞台で演習している。その様子をガリヴァによって上の方から見下ろされるのだ。リリパットの24騎は巨人国の馬の対照物として、リリパット国の小ささを印象付けるために登場させられているのだ、と解釈することが可能であろう。

リリパットにおいても、それ以外のどの国においても同様であって、ハンカチの上での演習に限りはしないのであるが、馬を何らかの仕方で登場させ、いかにも馬らしい行動をさせて、それを繰り返して記述しておくことが、第4篇「フウイヌム渡航記」に至る以前の段階において必要であった、ということかも知れない。周知のように「フウイヌム渡航記」に登場する馬たちは、馬であって馬でない、いわば異質の生物である。その異質さを際立たせるという意図の下、これに先立つ三つの渡航記において折に触れて描かれる馬は、いかにも馬らしい馬でなければならない、という訳である。普通の馬がどのようなものである

かを作品の中で読者に再確認させておくことが必要であったとすれば、騎兵の演習などはそのためには最も適当な手段のひとつである、ということではないだろうか。更には、ガリヴァが想像する、フウイヌムに蹂躪されるヨーロッパ人の図とも深い関わりがあるように思われる。また、フウイヌムにガリヴァが語って聞かせるヨーロッパの馬の悲惨な状況のエピソードも同様である。フウイヌムについてはこれまで様々な解釈がなされてきたが、それも含めた「馬」がどのように作品で描かれているかに注目すれば、何か目新しい観点から作品全体を解釈し直すことも可能かと思われるということ、ここで指摘して置きたい。

更に付け加えるならば、諷刺の上の必要性ということも考えられる。リリパット国王はこの演習を見てたいそう喜んだのであるが、この故にガリヴァは自由の身にしてもらえたのである。国王に対して作者の意識の中に批判的な要素が存在している場合には、国王の喜んだ理由が馬鹿馬鹿しいものであればあるほど、彼の人品を貶めることになる。騎兵の演習は、普通に地上の演習地であれば良く、わざわざ狭くて足下のおぼつかないハンカチの舞台の上でする必要はまったくないだけでなく、そんなものを見ても普通は大して面白いとは思えないであろう。にもかかわらず、この国王は「大いに御満悦」であったという。彼はかなり愚かな人物であるかのように描かれているのである。ガリヴァの股の下を行軍させるという変な余興を思い付いたのもこの国王であった。

このような国王と比べて、騎馬隊の演習は女性向けの余興であるとは言えないにせよ、この余興をあまり喜ばなかった王妃の方がまだしもまともである、ということになる。後段の火事のエピソードではガリヴァの敵になる王妃ではあるが、この段階での扱いは普通かそれよりは上である。あるいは故人であるアン女王に対しての配慮が作者スウィフトの意識には存在したのかも知れない。以上のような理由で、ハンカチの上の演習の余興を通じて、愚かな国王を諷刺するという作者の意図と、一般的にはアン女王を表すのではないかと推測されている王妃について何らかの印象を読者に与えるという意図とが垣間見られるということである。

更に推測を続けよう。我々が取り扱ってきたハンカチの上での演習のエピソードは、既述のように、かなりマイナーなエピソードであることは否定できない。例えば、ガリヴァによるブレフスキュ艦隊の拿捕の場面や、宮殿の火災の鎮火の場面などのいわゆるメジャーなシーンと比較してみれば、それは明らかである。この両者は、この作品の後世の縮約版や子供向けの改作版では大抵の場合省略されることがなく、ガリヴァが大活躍する場面として多くの読者の

印象に残されてきたものであると考えられるのであるが、ハンカチのエピソードは省略されてしまう場合がかなり多いようである。筆者がこれまで調べてみた限りにおいては、子供向けの簡略版では約3分の1の割合で、絵本の場合はほとんど例外なく、演習のエピソードは省略されてしまっている。絵本の中でこのエピソードが省略されていない唯一の版は、筆者が知る限り、Newton Classics 第23巻の『ガリヴァ旅行記』である。これは、絵本というよりはコミックス版と言うべきものなのであるが、これには、火事の消火の部分が収録されていない代わりに、演習のエピソードが盛り込まれているのだ。^{注16} ただし、その場面は、絵を見る限り、ハンカチの上であるという訳ではないようである。更に物語の展開上の意味も改作者（姓名不詳）によって込められている。事故で命を落としそうになった乗り手が、ガリヴァに助けられたのを恩に着て、後にガリヴァに報いるというのである。演習のエピソードを残してあるとは言っても、それは原作通りではなく、近代的な物語上の新たな意味付けがなされた上で、残されているのである。こうしたことから、ハンカチの上での演習のエピソードが元来持つ重要性の低さが窺えるのである。

ここで注意しなければならないのは、上述のメジャーなシーンにおいて、殊にブレフスキュ艦隊の拿捕のシーンにおいて、ハンカチのエピソードが抱えているのと同じ問題が生じているということである。ガリヴァは50隻の艦隊を一度にロープで引っばって来られたことになっているが、12分の1の縮尺を遵守する限り、実際には軍艦1艦を引いて来るだけでも相当大変だったに違いないのである。より重要なエピソードの不自然さを前もって和らげておくという効果が、ハンカチの余興のエピソードには期待されていたのではないだろうか。これは読者に対する一種のごまかしとでも取れる手法であるにせよ、12分の1という設定をあまり厳密なものと考えない素朴な読者にとっては、これでもかなりの効果があったのではないだろうか。あるいは、12分の1という設定自体が絶対的でないということを、大きな事件に先立って、小さなことがらの中で前もって暗示するという意味合いがあったということなのかも知れない。

それから、これはよく言われていることなのであるが、ガリヴァの語り自体が虚構であることのヒントもしくはサインとしてこのような不具合をとらえるという方法もある。物語の内容自体が物語の真実性を否定してしまうというのである。その際は、作者はある程度意図的に不具合を残しているのだという解

注16 山田直道監修、齋藤洋子翻訳『ガリヴァ旅行記』（ニュートンプレス、1997年）、18頁。

釈になる。筆者は個人的にはこの考え方が恐らく最も正しいのではないかと考えているのであるが、敢えてこの小論では、これと正反対の方向に論を進めてみたという訳である。

更に、付け加えるならば、ハンカチ自体の持つ意味という観点からもこの件を考えることができる。この小論の前半では舞台の構造を詳しく扱ったが、その際、舞台になったハンカチにどのような意味が込められているかは述べなかった。そこでこの場でこの件に関してひとつの可能性を指摘して置きたい。

我々の解釈に従えば、舞台の構成は、真上から見て、次の通りになるであろう。すなわち、9本の柱のうち4本が正方形の四つの頂点に、4本が四つの辺の中間点に、そして1本が正方形の中央に配置されている。更に4本の横棒が各辺を構成して正方形の輪郭を描いている。この全体像を真上からしばし眺めてみる。そして、試みに九つの点を結んでみる。その結び方にはいろいろあるが、正方形の対角線を2本、向かい合う辺の中央同士を結ぶ線を2本、合計4本の線を引いてみよう。すると浮かび上がって来る図形は、何と我々がしばしば目にするユニオンジャック(正式にはユニオンフラッグ)になるではないか。もちろん、ガリヴァのハンカチの色は赤でも青でもないだろう。色が何色かはおともと書かれてはいないのだ。白かも知れないし、色がついていたかも知れない。無地かも知れないし柄物であったかも知れない。仮に白いハンカチだったとしよう。すると、ユニオンジャックの縦横斜めの計4本の線と赤と青の二つの色とは、まったく我々の脳裏にイメージとしてだけ存在することになる。しかし、こうした暗示さえあれば、深読みをしようという我々の意図は十分満たされ得るのである。イングランドとスコットランドとの連合の欺瞞性を、ひいては国家という制度そのものの恣意性を、作者が批判的に捉えていて、二つの国家の連合を象徴する国旗「ユニオンジャック」をちっぽけなりリパットの馬どもに踏みにじらせるという意図があったのかも知れないのである。^{注17}

また、それよりももっと分かりやすい理由も考えられるだろう。すなわち、作者はスコットランド人を嫌悪しており、連合そのものに反対であった、ということである。三浦 謙は『炎の軌跡』の中で「スウィフトはスコットランド人を嫌っていた」と述べ、更に「18世紀最大の政治成果といわれるイングランドとスコットランドとの連合をスウィフトは白眼視した」と断定している。^{注18}

注17 ここでいうユニオンジャックは、アイルランドを表すセントパトリックの赤い斜線がまだ入られていないという点で、現在のものとは異なっており、より単純な意匠であることに注意されたい。

その理由として、イギリス国教会の立場に立つスウィフトは、非国教徒としてのスコットランド人を危険視したという、宗教的な事情が挙げられている。恐らく、ことはそれほど単純ではないにせよ、歴史上しばしば差別的な扱いを受けてきたスコットランドに対して、スウィフトもかなりの偏見を持っていたのであろう。そのことは彼の執筆した「ホイッグ党の公共精神」“The Publick Spirit of the Whigs”の中の、スコットランド及びスコットランド人を嘲笑するかのような次の表現にも表われている。彼はスコットランドを「貧しい獐猛な北方民族の住む、島のあの部分」(That Part of the Island inhabited by a poor, fierce Northern People)と称しているのである。^{注19}

しかしながら、ハンカチがユニオンジャックであるというこの解釈が、どれほど適切なものであるかは確証はない。具体的で決定的な証拠をここで新たに提示することができるという訳ではないのだ。筆者は、たまたまアン女王の治世下にあった1707年のThe Union Actによる「連合王国」の最終的な成立というできごとを当てはめてみただけである。そして、ユニオンジャックを誇らし気に見ているアン女王の姿と、ハンカチの舞台をつまらなそうに見ているリリパットの王妃の姿、という対照的な図には、何かしら意味がありそうな気がするということだけのことである。従って、この解釈自体は、あくまでも筆者の勝手な想像の域を出ないということは、率直に認めざるを得ないのである。また、一般には、スウィフトと言えば「アイルランド」であって「スコットランド」ではない、というのが固定観念のようになっているせいもあって、この件に関しては今のところ自信を持つに至っていない。

しかしながら、『ガリヴァ旅行記』には、こうした勝手な解釈も含めて、いろいろな背景や意図をあれこれ推測して楽しむという読書の仕方を読者に許してくれそうなどころがあることもまた事実であろう。解釈の可能性の広さという点でいえば、この作品は常にその楽しみを我々に提供してくれていると言って良さそうである。全体としては、作者の配慮の不足と作品の不備は、読者にそれを補う努力を強いるという点では非難に値する点ではあるが、そのことによって、かえって作品の深みと幅とが増しているかのように捉えることもできると言えるかも知れない。こうしたことから『ガリヴァ旅行記』という作品

注18 三浦 謙『炎の軌跡 ジョナサン・スウィフトの生涯』(南雲堂、1994年)、133頁。

注19 Jonathan Swift, “The Publick Spirit of the Wings,” in *Political Tracts 1713—1719*, ed. Herbert Davis and Irvin Ehrenpreis, Vol. VIII of *The Prose Writings of Jonathan Swift* (Oxford: Basil Blackwell, 1953), p.49.

の特質の一端である遊戯の精神を、我々は再確認することができるのではないだろうか。

結び

この小論で、ガリヴァの作った騎馬隊の演習用のハンカチの舞台を題材にして示してきたのは、以下のようなことからである。

まず第一点は、その舞台は与えられたいろいろな数値を何ら変更することなく製作することが可能であること、である。作者の説明は不親切であるし要領を得ない点も確かにあるのだが、少し集中して考えてみることで、存外簡単に舞台の構造を把握することができた。縦棒が垂直ではなく少し斜めに傾けられているということ、すなわち舞台は横から見て台形になっているということが、最重要ポイントである。このことは、一旦思い付いてしまえば、これまでどうして気がつかなかったのだろうと不思議な気がするほど簡単なことではないだろうか。

第二点は、12分の1という設定に固執する限り、ハンカチの舞台の上で24騎の馬が演習を行うのはどう考えても不可能である、ということである。多くの論者と同様に、12分の1という設定を棄ててしまうことも解決策のひとつではある。しかし、敢えて12分の1の設定を尊重する態度を貫こうとすれば、いかなる手段が取れるのかを今回考えてみたのである。そして現実的な解釈の他に提案することができた解釈方法が、「落語的」で「超現実的」な解釈方法であった。

ハンカチの舞台上での演習のいきさつが記述された、ひとつのパラグラフの中で、その前半に書かれていることから、すなわち舞台の製作方法に対しては、極めて現実的な解釈を適用し、あたかも実際に舞台を作り上げるための解説であるかのような仕方で論述をしてきた。それにも関わらず、同じパラグラフの後半部分、すなわち騎馬隊の演習に関しては、これとはまったく正反対の論法を用いて、超現実的な解釈法を提案した、という訳である。

このことは一見大きな矛盾のように思われるかも知れない。だが、こうした臨機応変な読み解き方を採用することは、『ガリヴァ旅行記』のような特異な作品に対する際には、ある程度やむを得ない手段であるだろう。否、場合によっては必要な手段でもあるのではないだろうか。もちろん、このような読解が最も正しいものであるなどと言うつもりはない。あくまでも、ひとつの可能性として提示したものであるということは最後に申し述べておかねばならないだろう。

その伝で言えば、この小論の末尾でいろいろな解釈を列挙した箇所も同様で

ある。とりわけ、ユニオンジャックとアン女王の件については、現在のところでは単なる思いつきの域を出ていないということは率直に認めたい。スウィフトとスコットランドとの関わり合いも含め、この件は今後も鋭意材料を集めて考えを深めねばならない問題点のひとつである。いずれにしても、『ガリヴァ旅行記』の細部の解釈に関しては、まだまだいろいろな可能性が指摘できそうだとしたことだけは、どうやら確かなことであるらしいのである。